

英米文学史講座 1

中 世

アングロサクソン文学	小 林 淳 男
ベオウルフ	厨 川 文 夫
中英語文学概論	外山滋比古
ラングランド	大 山 俊 一
チョーサー	梶 井 迪 夫
ロマンスとアレゴリー	吉 田 新 吾
演劇の起源	木 方 庸 助
アーサー王伝説	宮 田 武 志
散 文	宮 部 菊 男
バラッド	佐 藤 文 一
スコットランド詩人	御 興 員 三
英文学に対する古典の遺産	神 津 東 雄
歴史的背景	上 野 景 福



英米文学史講座 第一卷

中 世

600—1500

研 究 社

英米文学史講座 第一巻

中 世

昭和 37 年 2 月 1 日 印 刷 昭和 37 年 2 月 15 日 初版発行

昭和 52 年 11 月 10 日 14版発行

監 修 者 福 原 麟 太 郎
西 川 正 身

発 行 者 山 本 友 一 東京都新宿区神楽坂1の2

印 刷 所 研究社印刷株式会社 東京都新宿区神楽坂1の2

発 行 所 研究社出版株式会社 〒162
東京都新宿区神楽坂1の2
振替口座 東京 7-83761番

3398-102001-1860

英米文学史講座

目 次

アングロサクソン文学	小 林 淳 男	1
ベーオウルフ	厨 川 文 夫	17
中英語文学概論	外 山 滋 比 古	35
ラングランド	大 山 俊 一	51
チャーサー	梶 井 迪 夫	68
ロマンスとアレゴリー	吉 田 新 吾	93
演劇の起源	木 方 庸 助	110
アーサー王伝説	宮 田 武 志	128
散 文	宮 部 菊 男	150
バラッド	佐 藤 文 一	171
スコットランド詩人	御 輿 員 三	188
英文学に対する古典の遺産	神 津 東 雄	207
歴史的背景	上 野 景 福	224
英米文学年表 (1500 年まで)		243
索 引		253

アングロサクソン文学

小林 淳 男

序論 i. アングロサクソン文化

ゲルマン系に属するアングロサクソン人は紀元五世紀の中頃から北ドイツの土地を離れて続々海を越えブリテン (Britain) に侵入し来り、土着のケルト人を征服しこの土地に定住することになった。やがてローマ法王グレゴリウス一世 (Gregorius I, A. D. 540-604) によって派遣されたアウグスティヌス (Augustinus) を頭とする宣教師団が布教のため来たので、異教徒アングロサクソン人はキリスト教に改宗し、修道院が建てられたり、ローマの学芸がアングロサクソン人の間に弘まった。キリスト教宣教師達は異教の事物に対して比較的寛大で、之を破壊せず、時には宣教のため利用さえもしたので、異教のゲルマン文化とキリスト教のローマ文化とは融合し、ここにアングロサクソン文化が出来上り、それがまたアングロサクソン文学によく反映している。

ii. アングロサクソン文学一般

アングロサクソン文学は紀元 700 年から 1100 年までの文学で、叙事詩、悲詩、教訓詩、抒情詩などの外に、聖者伝、神学論、説教集、翻訳書などの散文から成る。これらが今日まで伝わって来たものだが、恐らくこれと同量位の作品が既に失われてしまっていると考えられる。

詩は主としてアルフレッド王 (King Aelfrēd [Alfred], 在位 A. D. 871-901) 以前において栄えたが、今日残っているのはおよそ 29,000 行に及ぶが、殆んど全部キリスト教聖職者の手に成ったものである。その現存の詩の大部分は 紀元十世紀後半頃に書かれた 4 冊の写本の中に収められてい

クソン時代は産業的機械的近代生活とはおよそ縁遠く、従って文学の主題の範囲なども限られておったので、華美で官能的な近代文学の趣などは存在せず、文学の表現なども語句の繰返しなどが多くて何か完全でない感じを与えるが、その反面、潑刺たる原始的生氣、雄々しさ、単純だが強い道徳的性格が見えて我々に迫るものがある。しかし作品の中には、古い作品ながら近代的感覚に近い魅力をもつものがあることも事実である。

iv. アングロサクソン詩の詩形・スタイル

アングロサクソン詩の詩形、スタイルには独特のものがある。詩形上の特色はゲルマン民族に共通するところのものだが (a) 詩行は中央に休止 (caesura) をもち、二つの半行 (half-line) に分れ (b) 詩行は各半行に二つずつの強勢 (stress) をもち (c) 各詩行には三つの頭韻 (alliteration)、即ち第一の半行に 2, 第二の半行に 1 の頭韻がある。頭韻の約束として、語頭の母音または二重母音は他の如何なる語頭の母音または二重母音とでも相互に頭韻を踏むが、子音または子音群は必ず同じ子音または子音群とでなければ頭韻を踏まない。sp-, st-, sc- の場合は、st- は st- とだけ頭韻を作り、st- と -s, st と sp- などの頭韻はアルフレッド王以前の詩では作られなかった。(d) 脚韻 (end-rhyme) は踏まない。

Oft *Scyld* *Scēfing* | *scēapena* *prēatum*,
mōnegum *mægum* | *meodsetla* oftēah. (*Bēowulf*, ll. 4-5)

「スケーヴィングのスキュルドは、しばしば敵の群から、多くの部族から、宴興の席を奪いとった」

詩は詩節 (stanza) でまとめられて行くのではなく、行単位 (stich) で連続して行くのである。またアングロサクソン詩は同意語 (synonym) または同じ意味の句をいくつも重複することを好んだ。例えば「海」を示すに「潮流」(lagor-stream)、「海路」(mere-stream)、「槍の海」(gar-secg)とい

う同じような表現が重複して出てくる。またアングロサクソン詩にはケンニング (kenning) という表現が用いられている。それは一つの名詞に対して、二つの語を独立させ句として用いるか、或はつないで複合詞の形にして用いるか、とにかくまわりくどく比喩的に表現する方法である。例えば「羽毛」を示すに「鳥の喜」(fugles wynn)、「太陽」のことを「人々の歎びのともしび」(wyncondel wera)、「眼」のことを「頭の宝玉」(heafod-gim) という表現を用うようなものである。

A. 叙事詩

Widsith (『ウィードシース』) は「遠い旅」、更に「遠く旅する人」を意味するが、これは詩中において独白の形で語っている人物の実名ではない。一人の人物が、143 行の詩のうちで約 40 行を占めている王名の長いリストに載せられている人物に一々会えるわけがない。この詩は実在の遍歴詩人の実際の旅行記と考えらるべきものでなく、詩人は死んだ王や武士たちの古伝説を愛した人らしく、王名の古いリストや伝説をまとめて一つの架空的な短詩に作りあげたものと思われる。而して善い王は臣下から大きな支援をうけられるものだという教訓を含めたものであろう。

Bæowulf (『ベーオウルフ』) はアングロサクソン詩中、最も完全に保存された最も傑れた雄大な英雄叙事詩である。この詩の物語は二部に分けられる。第一部 (ll. 1-2199) はベーオウルフという英雄がデンマークの宮廷を悩ます食人鬼グレンデル (Grendel) と闘ってその片腕を奪い、更にグレンデルの母親が宮廷の重臣を殺したので、この沼の女怪を求めて之を刺し殺す話である。第二部 (ll. 2200-3182) はベーオウルフが国民を苦しめる火竜と闘って之を殺し、遂に自分も傷いて倒れる話である。この詩の大筋は架空な話であるが、事件や人物の或ものは歴史的事実のもので架空と実在とがからんでいる。またこの詩の中では異教とキリスト教の慣習や信仰が混合している。これは当時キリスト教の光が行き渡っても、異教の古い信仰や観念が直ぐになくなるに至らず両者が共存していたためであった。

この詩は武士の首領に対する忠誠心を描いたもので、武士の理想像が示されている。

The Fight at Finnsburg (『フィンズブルフの戦』) はフネフ (Hnæf) に率いられたデイン人 (Danes) とフィン・フォルクワルディング (Finn Folkwolding) に率いられたフリジア人 (Frisians) 並にその同盟軍との間の戦争物語の一節で、現存するのは 48 行の『断片』に過ぎない。同じ物語の一節は *Bēowulf* の中に「フィン挿話」(Finn Episode, ll. 1069-1159) として出て来るが、「挿話」の方は「断片」に述べられた出来事の続きに当たる。この「断片」、「挿話」とともにデイン人の立場に立って述べられている。この断片詩は包囲されたデイン人がフリジア人の攻撃に抵抗する場면을印象的に述べたものである。

Waldere (『ワルデレ』) は断片しか残っていない。好古家以外には興味のうすいものであろうが、第一の断片(31 行余)はヒルデグンド (Hildegund) が彼女の恋人ワルドヘレ (Waldhere) を激励する言葉の一部であり、第二の断片(31 行)はグンセル (Gunther) の言葉の終りのところから始まって、ワルドヘレの反抗的な答となっている。

The Battle of Brunanburb (『ブルーナンプルフの戦』) は 70 余行の詩であって、*The Anglo-Saxon Chronicle* (『アングロサクソン年代記』) の中に紀元 937 年の記事として挿入されているものである。この年エセルスタン王 (King Aethelstān) とその弟エアードムンド (Eādmund) はスコットランド王コンスタンティン (Constantine) の率いるスコットランドとデインの連合軍を破って勝利を収めた。この勝戦を讃えたのがこの詩である。作者はアングロサクソン戦争詩の古い伝統に従ってこの詩を書いている。

The Battle of Maldon (『モールドンの戦』) は、紀元 991 年デイン人の大軍がエセックス (Essex) のモールドンに襲来したとき、寡勢をもって応戦し壮烈な戦死を遂げた太守ビュルフトノース (Byrhtnoth) とその部

下を讃えた詩である。この詩の作者は *The Battle of Brunanburh* の作者の如く戦争全体を描こうと企てたのではなく、家臣の王に対する忠誠心とその英雄的精神を描いたものである。この詩はアングロサクソン末期の作であるが、矢張アングロサクソン古来の伝統に則って書かれたものである。

B. 抒情詩

The Wife's Complaint (『妻の嘆き』) は若い妻が独白する形で書かれており、妻の夫に対する愛情の表白である。彼女の夫は恨を買って国外に逐われたのもあろう。妻はとり残こされて、森の檜の木の下に洞穴に閉じこめられている。彼女は敵を怨んで呪いをかけ、敵も何時かは彼女が現在味っている惨めさや淋しさを知る時もあると嘆くのである。

The Husband's Message (『夫の手紙』) は、手紙を刻みこまれた木片自身が、刻まれた夫の便り、即ち夫の操守の固さということを、故国で待ちわびている忠実な妻に伝える形になっている。夫の妻に対する愛情の告白である。かっこう鳥の歌が聞かれる春になったら、自分のところへ来てほしいと夫は妻に伝えている。

Wulf and Eadwacer (『ウルフとエアドワケル』) は愛する男から引き離された不幸を嘆く女の独白である。女の愛人ウルフは今は引き離されて別の島におかれており、女と同居している夫エアドワケルは暴虐な人なので女は憎んでいる。女は昔の幸福を想い出しては嘆くのである。

Dēor's Lament (『デーオルの嘆き』) は競争相手の詩人によって主君の寵を奪われた吟遊詩人の嘆きを歌ったものである。彼は昔あった不幸の例を六つ想い出しては、自分の現在の不幸な境遇を慰めている。「折返し」(refrain) のところで、彼以前に起きた種々の不幸も今は過ぎ去ってしまったことなのだから、やがては彼の現在の不幸も同様に過ぎ去るであろうと願望を述べている。これはアングロサクソン抒情詩に共通するところの思想で、時が経てば人間も消え行くという変化の真理を肯定したものである。

The Wanderer (『さすらいの人』) は昔主君の館で幸福と名誉とを十分享

けてきた男が独白する悲歌である。今や彼は主君には死別し、地位は失い、故国を離れて遠くさすらっている。彼は主君在世中の華やかな宮廷生活を想い、今や彼個人の歎びがすべて去ったことを嘆き、地上到るところに起った栄華の没落を顧み、万物は悉く移り変り、空に帰すものだと叫ぶのである。

The Seafarer (『舟人』) は老水夫と船乗になりたがっている青年との対話であると説いている人もあるが、対話であると明示できる根拠はない。それは他のアングロサクソン抒情詩と同じく、独白であると考えることができる。舟人が海上の労苦や危険を知りながらも海の魅力にひかれて、陸上の歓楽を蔑げずみ、地上における栄華の果敢なさと死後における永遠の幸福を考えるようになることを歌ったもので、舟人の生活を知りつくした人が八世紀の初頭に作ったものと考えられている。64 行までは海と舟人の労苦が描かれているが、それ以後は急に静かな敬虔的な調子に変っている。

The Ruin (『廃墟』) は断片の形においてしか残っていないが、アングロサクソン悲詩中での優品である。吟遊詩人がバース市 (Bath) と思われる城市の荒れた廃墟を訪れ、昔の栄華を偲び嘆いた詩で、悲嘆の情の激しさ、憂愁の調子の高さが我々の胸をうつ。

C. 教訓詩

Gnomic Verses (『格言詩』) は約 300 行が今日まで伝わっているが、詩の発達の初期の段階を示すものとして興味深い。自然現象や人間生活についての考察、道徳的金言、種々の短い知恵などを含んでいる。詩の中で異教の知恵とキリスト教の教訓とが混り合っている。

The Riddles (『謎詩』) は 95 篇あるが作者は一人ではないと考えられ、年代も同じでないが大部分は八世紀の作であろう。題材もまちまちで、文学的価値の点でもいろいろあり、優れたものもあるがテキストが不完全で意味がつかめないものもある。

D. 宗教詩

宗教詩は詩形も題材の扱いかたの点も、今まで述べてきた非宗教詩と殆んど変らない。宗教詩人はキリスト教やラテン文学から得た材料を、伝統的なアングロサクソン文学になぞらえて書いたのである。

a. キャドモン (Cædmon) とその一派

アングロサクソン宗教詩はキャドモン (Cædmon, A. D. c. 670) に始まる。彼の作と称せられているものは次の4篇であるが、写本にはキャドモ

nurcrlun hāf; gōr he fædrica f uapd mēd daf mæc nān d h y m o d g d a n c u f c u u l d u r f a d u p
 f u e h e u u n d y a g i h u a f & i d y f t a i n o p a f e l a b e h e a f u f f i w p a e l d a b a p n ū h e b d i l l i y o p e
 h a l g y a f i a c h a m m d u n g e a y d m o n f m a f u a y d & i d y r c a n a f t a f d a d a f n u m p o l d f g e a l l m a f g
 p r i m o C a e d m o n i f f u d C a r m a

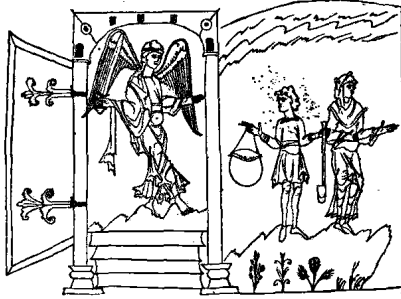
Cædmon の Hymn の写本

ンが作者たることを示す言葉は一つも書かれていないので作者不詳とすべきであろう。

Genesis (『創世紀』) は従来一つの詩でキャドモンの作と考えられていたが、今日、これは二つの詩から成り、何れもキャドモンの作でないであろうということになった。*Genesis A* (『創世紀 A』) は聖書の「創世紀」第1章第1節から第22章第13節までをパラフレーズしたもので、これは *Vulgate* (『ラテン語訳聖書』) の物語を英訳したものである。大体八世紀頃の作。然るにこの詩の ll. 235-851 は後人の挿入であることが解ったので、この600行の部分 *Genesis B* (『創世紀 B』) 或は *The Later Genesis* (『後期の創世紀』) と名づけ九世紀の作と推定されている。

Exodus (『出エジプト記』) は聖書の「エジプト記」に拠っている。イスラエルの民がモーゼに率いられてエジプトを脱出し、紅海の岸まで来ると海が割れ、海底に路が開けて彼等はこれを通り対岸に上った。追跡するエジプト軍が海底の路に入りこむと、海は閉じエジプト軍は海底に沈んだ。作者はこの聖書における脱出、追跡の物語をゲルマンの英雄詩風に戦争として描いている。

Daniel (『ダニエル書』) は聖書の「ダニエル書」に拠っている。傲慢を戒め謙虚な心をもって神に従うべきことを説いている。詩中、若者たちが



楽園から追放されるアダムとイヴ
(Cædmon の写本から)

投げこまれた炉の火から神によって救い出され、神への讃仰の言葉を捧げる辺の描写は美しい。

Christ and Satan (『キリストとサタン』) は三部から成り、第一の詩は天使の堕落、第二の詩はキリストによる地獄の征服、第三の詩はキリストの受けた試みを主題としている。

b. キュネウルフ (Cynewulf) の署名入りの詩

キュネウルフの年代も生地も確実なことは解らないが、八世紀後半から九世紀の初期にかけてアングリア方言地域 (Anglian) に生存した人であることは確かである。何れが彼の作品であるかについては諸説が出ているが、キュネウルフの署名が入っている次の四つの詩は大体彼の作であることが確実と思われる。

Christ (『キリスト』) は三部から成り、全部で 1664 行である。‘The Advent’ (「キリストの降臨」) は信心深く熱心な待望を取り扱い、マリアとヨセフの対話は劇的である。第二部は ‘The Ascension’ (「キリストの昇天」) で、法王グレゴリウス一世の説教が材源となっている。第三部は ‘Domesday’ (「最後の審判」) で最も重要なところ、来るべき世界における平和と喜びの期待を力強く描いている。

St. Juliana (『聖ジュリアーナ』) は女の聖者伝で、キリスト教徒の美少女ジュリアーナが異教徒との結婚を拒んだために拷問されて苦しむが、信仰を変えず遂に殉教する話である。

Elene (『エレネ』) も女の聖者伝でキュネウルフの傑作である。皇帝コン

スタンティンは、匈奴との戦争の前夜、十字架の夢をみたので醒めてから、十字架を造らせ之を携えて戦い敵を敗走せしめる。戦後皇帝は母エレネを聖地に派し、キリストの磔刑に用いられた十字架を探させ、之を発見する物語である。この話はキリスト教徒のすべてに興味のあることである上に、聖地における冒険譚でもあるので、当時の人々に大に訴えるところがあったに相違ない。

The Fates of the Twelve Apostles (『十二使徒の運命』) は十二使徒の名とその運命についての話を盛った 122 行の詩である。

c. その他の詩

その他、キャドモンやキュネウルフの詩と内容や表現の似ているところの多い宗教詩が幾つかある。

Andreas (『アンドレアス』) は聖者伝で、この詩はキュネウルフの作ではないにしても、彼の一派に属する詩である。アンドレアスは、食人種マーメドニア人 (Mermedonians) に囚えられている聖マテウス (St. Matheus) を救出したので、食人種は怒りアンドレアスを苛責するが傷つけられない、却って彼が種々の奇蹟を行うので食人種は恐れをなし、キリスト教に帰依するという話で、仲々ロマンティックで美しい。

Gūþlāc (『グーズラーク』) は聖者伝である。前半 (ll. 1-818, *Gūþlāc A* と称される) は聖者が悪魔に悩まされ天使に慰められる話であるが、後半 (ll. 819-1379, *Gūþlāc B* と称される) はキュネウルフ署名入りの 4 篇の詩と似たところがある。あらゆる危難を冒して神の意志を行わんとする聖グーズラークの生涯の話である。後の永い痛々しい病氣と死の話は我々の胸に迫るものがある。また臨終に当って従僕を呼び、善良な生活を営みつつやがて死に対処すべきことを諭し、安んじて息を引くとすると同時に太陽も沈んで行くあたりの描写は悲壮美に溢れている。

(*The Dream of the Rood* (『十字架の夢』) はキリスト磔刑の時の十字架を讃仰する詩で、アングロサクソン宗教詩中最も美しいものの一つである。作

者が夢の中で見る十字架が、作者に自らの来歴とキリスト処刑の模様を語ってきかせる。作者の見る輝かしい夢、単純で敬虔な驚き、十字架の語る処刑の模様の悲哀感は印象的である。抒情的新鮮さと優しさと宗教感情の組み合わせられたこの詩は、中世教会人と同じく現代の俗人にも訴うる事が大きい。

Judith (『ジュディス』) は聖書の経外典の一書を基にした詩で、九世紀後半の作らしく、作者は不明である。少女ジュディスが異教徒のアッシリア王ホロファネス (Holofernes) を殺し、アッシリア軍を全滅させる話である。この詩においては、清纯、篤信、賢明、勇敢、美德を具える美少女が狂暴、淫乱、邪悪の王と対立せしめられ、力のこもった優品である。

E. 動物寓意詩

Physiologus (『動物物語集』) は豹 ('The Panther,' ll. 74)、鯨 ('The Whale,' ll. 88; ll. 82^b-83 欠除)、鷓鴣 (𪗇) ('The Partridge', ll. 16, 断片) の一部から出来ている。この詩はそれぞれ動物の習性、動作、身体的特徴を記して、そこに道徳的教訓を寓意せしめた。例えば鯨が自分を水夫達に島と思いこませ、彼等が乗ったところを一挙に海中へ引きずりこむ話を書いて、悪魔が人間を誘惑して地獄へ運び去ることを諷したという類である。

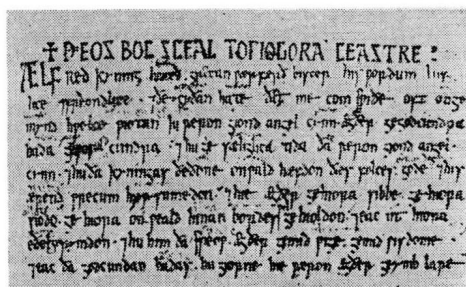
Phoenix (『不死鳥』) は *Physiologus* に比して寓意が一層凝っている。東の国の高い木の梢に不死鳥が棲み、千年生きるとシリアへ行き、棕櫚の木に巣を作り太陽から火を得てわが身を焼く。その死灰から新しい不死鳥が生れる。この不死鳥は現世並に未来世におけるキリスト教徒の生活、或はキリストその人の象徴と解釈されている。詩人はこの極めて古いヨーロッパの伝説に着色するのにキリスト教的象徴をもってしたのである。

F. アルフレッド王 (King Aelfrēd) の作品

アングロサクソン散文で本が書かれるようになったのはアルフレッド王の時からで、実用の目的からであった。それ以前は散文の書物は大部分ラテン語で書かれていた。アングロサクソン散文家として有名なのはアルフレ

ッド王、エルフリック (Aelfric)、ウルフスターン (Wulfstān) の三人である。

アルフレッド王はイングランド又は外国から招いた学者の協力を得ながら、王が国民に読ませたいと望んだラテン語の書物を、アングロサクソン散文に翻訳した。それは次にあげる5冊の書物であるが、アングロサクソン散文の標本として重要である。王はイギリス人の立場に立って翻訳したので、原文を省略したり、解説したり、別のもので置き換えたり、原文にないものを訳文中へ加えたりした。



Cura Pastoralis に附けた Aelfrēd の序文

一は法王グレゴリウスの *Cura Pastoralis* (『司牧者の心得』) の英訳。原書は司牧者の任務と教化の方法を説いた司牧者の必携書である。英訳は王の英訳中最初のもので、意識的パラフレーズである。

王がこの英訳につけた序文は翻訳に対する王の態度を述べたもので、イングランドの学問の衰微を嘆き、自らラテン語の本を英訳して国民文化を再興しようとする王の意図を説いたものである。

二はオロシウス (Orosius) の *Historia adversus Paganos* (『異教徒を駁する歴史』) の英訳。原書は地理的記述の後に、アッシリア王ニヌス (Ninus) と王妃セミラミス (Semiramis) の話、ソドム (Sodom) についての記述、ローマの歴史という順序で紀元414年まで書いてある。翻訳に当って王は原書の内容に多くの増減を加えたが、概して言えば冗長な道德話を略して短かくした。しかし王がこの書物に書き入れた最も重要なことは、イギリスの北部、東部についての地理的知識であった。即ちスカンジナビア半島の北部を航海したノルウェー人オフトヘレ (Ohthere) とバルティック海を旅行したデイン人のウルフスターン (Wulfstan) の二人の旅行記で、